

ISBN4-7601-2252-4

C0021 ¥2000E

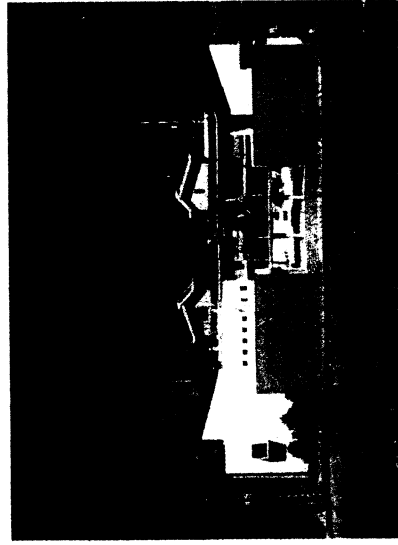
定価(本体2,000円+税)



9784760122523



1920021020001



なつみの家歴史館ハンドブック

いのちの
いのち

なつみの家歴史館後援

つづき 048-2424

横浜市立図書館



2027754620

なつみの家歴史館 ハンドブック



いのち

KJ

なつみの家歴史館後援会=編

柏書房

210.7

2部

ナヌムの家のハルモニたち



ナヌムの家から歴史館へ

徐 勝

ナヌムの家

1991年、日本軍「慰安婦」問題が社会の重要な論点として浮上してから、なによりも困窮な生活を余儀なくさせられてきた被害者に対する支援対策が急がれた。ここでは政府の対策よりは民間の運動が先行し、まず仏教人権委員会が中心となって、「ナヌムの家設立推進委員会」(委員長、宋月珠 前大韓仏教曹溪宗務院長)が、1992年8月に結成され、同年10月、ナヌムの家が開設された。

ソウルの西橋洞ではじまったナヌムの家は、共同生活を希望するハルモニ、体を動かすのが不自由なハルモニ、一人暮らしのハルモニたちによる生活共同体である。これまで、入居ハルモニの変動はあったが、常時、10人前後のハルモニたちが暮らしてきた。

ナヌムの家は日本軍「慰安婦」被害者たちの共同の住居という意味を越えて、水曜デモへの積極的な参加、国内外の被害者発掘、ハルモニの証言や「ハルモニの絵画展」の巡回などを通じて、日本軍「慰安婦」問題の真相を国内外に知らせる役割を果たしてきた。なによりも、世界で初めての日本軍「慰安婦」の共同生活施設であるという象徴性を持っている。ジョン・ヨンジュ監督の「ナヌムの家」(原題:「低い声」)は、ハルモニたちのナヌムの家での共同生活を等身大に描き出し、世界の多くの人々に共感と感動をもたらし、ナヌムの家の名を世界に知らしめるのに大きな役割を果たした。

その後、ナヌムの家は篤志家が土地を寄贈し、民間募金と大韓仏教曹溪宗の支援で1995年12月、現在地に新しい施設を設けた。

歴史館の構想から建物寄贈に至るまで

1995年12月、ナヌムの家がソウル市内から「ハルモニたちの安住の地」として、京畿道の広州に移って間もなく、意貫前院長は新たな構想をめぐらした。ナヌムの家をハルモニたちの生活の場としてだけではなく、記念＝生涯の痕跡を残す空間、さらに、すでに亡くなったハルモニたちの慰霊空間を合わせた三位一体のものとして、発展させようとするものであった。つまりナヌムの家を

過去（歴史記録）、現在（生活）、未来（慰霊）の三位一体の空間としていく構想である。

1996年の11月、初めて来日した慧眞前院長から、「ハルモニたちの生涯の痕跡を残す」歴史記念館を設立する構想について相談が持ちかけられた時には、その着想と構想には基本的に賛同しながらも、資金や資料収集、参考とすべき人権・平和博物館などの見学、さらに学芸員の養成など、少なからぬ準備が必要だろうとの意見を提示したことがあった。「ふむふむ、そりゃそうですね」と、同意するような風であったが、その3カ月後には、韓国の新聞紙上に突如として、「挺身隊展示館起工式」という大見出しが躍っているのを見て、開いた口がふさがらなかった。人の言うことを聞くような振りをするが、決して聞かない慧眞前院長の面目躍如である。そして、97年3月には起工式が華々しく行なわれた。全ては、高度経済成長の神話の中で育てられた「急速」「巨大」を導ぶ、闇雲な韓国式突貫手法ではあるのだが……。

「日本軍『慰安婦』歴史館」の名称が決定するまでも曲折をへた。「博物館」「歴史博物館」なども提示されたが、小規模な資料館にはふさわしくなくとして退けられた。「この施設が日本軍『慰安婦』関係の一流の資料を集めた一般のミュージアムになるのは、無理な要求で、ハルモニたちの生活空間と隣接しているところから、ハルモニたち個別の生涯とその記録に特化した記念館になるべきである」という基本理念を提出し、比較的小規模な専門施設として「日本軍『慰安婦』資料展示館」を提案したが、「歴史館」という模範とした名前になってしまった。

いずれにせよ、「歴史館」は、はじめに箱物ありきで、その内容、展示物はその後を追うという急展開であった。そこには「大同」という会社が決定的な役割を果たした。当初、大同から「ナヌムの家」を健康のために良い黄土のオンドル床に改造しようという申し入れがあった。その提案を好機に、慧眞師がはじめは30坪の食堂を依頼したが、「大事なことは一日の食事をとる場ではなくハルモニたちの歴史を後世に残す歴史館だ」と、歴史館へと方向転換したところ、大同の郭正煥（クワンジョンフワン）会長が、会社創立10周年の記念事業として、これを快諾したという。はじめは、50余坪の本造建築という構想であったが、50余坪では歴史館としては狭すぎるという意見が出た。同じ予算でできるから、100坪規模のコンクリート建築にしてほしいと提案し、これも快く受け入れられ、最終案が確定した。

ナヌムの家・歴史館の構造と配置

日本軍「慰安婦」歴史館は、向かい合った二階建ての二棟展示館とそれを繋ぐ地下通路からなる特異な構造をもっている。なかなかしゃれたプランで、だれもが元々そのように設計されたものだと思うだろう。しかし、驚いたことに、仏教的因縁のおおらかさというか、韓国的な行き当たりばったりというか、上記の設立決定の経過でもそうであったように、次々と計画が変更され、偶然而なりゆきで現在の形になったのである。

「ナヌムの家」の敷地は、1992年に仏教徒である趙某氏が、「ナヌムの家設立推進委員会」で行なった募金運動の際に寄贈したものが、当時、その土地はソウル市民の飲み水を供給する上水源保護区域で準農林地だったため、農地法上、農民でない者は家を建てることができなかった。役所との交渉が行なわれたが、日本軍「慰安婦」ハルモニたちの施設という大義名分によっても公務員の拘子（こご）定規（じょうぎ）な考えを変えさせることはできず、その年の10月、「ナヌムの家」は結局、ソウル市西橋洞に借家住まいすることになった。

それから3年後の1995年、農地法が改定され、ナヌムの家建築のための募金運動は再開された。同年8月、ついに新しい「ナヌムの家」が納入された。当初、200余坪規模で一棟の建築設計が進められていた。ところが一筆地内で60坪以上の建築許可は下りないというので、やむなく設計変更されて60坪以下の三棟に分けられた。この内、一棟は、ハルモニたちの証言と生涯の痕跡を保存し、歴史教育の現場となる歴史資料館にすることを念頭におき、八角形の一風変わった建物となった。しかし、いざ建築してみると歴史資料館としてはあまりにも狭く粗末であるという意見が強く、一階は訪問客の宿所及び研修所、二階は仏さまをまつ御堂として使うことになった。

次に、歴史館設立の経緯である。1997年、「ナヌムの家」に隣接する300余坪の土地を買い入れ、設計がはじまった。当初、歴史館は100坪で構想されたが、一筆地に60坪以上は建てられないという例の規制で、60坪と40坪の二棟に分けて建築し、二棟を繋ぐ地下通路をつくることになり、地下に慰安所の模型を設ける案が生まれた。しかし、基礎工事をする時、ちょうど地下道部分に巨大な岩石が現れたので、展示館の基礎のかさ上げをして地下道で連結することにいった。そのために建物は高くなり、二棟の展示館の間には階段式の野外小劇場のような空間が作られたのである。また40坪の展示館が立った方の筆地には20余坪を建築する余地があったので、ログハウスを建てて、現在、休憩室を兼ねた宿所とした。2000年には、ログハウスに接続して木造の事務室が作られた。

融通の利かない農地法と建築法の規制の枠内でやりくりした結果、「ナヌムの家」と歴史館は60坪以下の建物が6棟という現在の姿になったのである。

建物の完成後、構内には、「手折られた花」の銅像、日本軍「慰安婦」ハルモニたちへの献詩、姜徳景ハルモニの慰霊碑、日本軍「慰安婦」追悼慰霊塔、巨大彫刻「大地の女」などが設置された。最近、姜徳景ハルモニの慰霊碑を境に、ナヌムの家と歴史館を区切る、瓦を載いた低い土塀が造られた。生活の場と記憶の場に区切りを付けるためとのことである。多くの訪問者によってハルモニたちの日常生活の静安が乱されはしまいかということが、かねてから懸念されていたが、これで少しはけじめがつくことを期待する。なお、ナヌムの家の周辺の林野には、所有主の許可を得てハルモニたちが耕す菜園がある。これらを含めて、ナヌムの家の生活圏といえよう。

ナヌムの家では、次第に老衰してゆくハルモニたちのために、菜園として使っている700坪の隣接地を買い取り、「療養院」(介護施設)を作ろうと、全国で一口30万ウォン(約3万円)の出資者を募る「一坪買い入れ運動」を2002年3月から展開中である。

展示資料

一般にミュージアムは、その予算の3分の2が展示資料の買い入れに当てられるという。しかし、市民たちの募金によって建てられた歴史館にはお金がなく、その資料は、人々の無私な協力により、ほとんど無料で集められたものである。資料購入費がほぼゼロであるということは、学芸員が定着しない問題とともに、歴史館の決定的な弱点であるが、一方、関心を持つ人たちが持ち寄って作った「手作り」の資料展示館であるという特色を肯定的に考えることができるかもしれない。

歴史館の資料は、大きく3つの部類に分けられる。まず、ハルモニたちの遺品や絵である。次に、韓国の芸術家から寄贈、ないしは材料費程度で提供された造形物である。そして、最後に歴史資料であるが、これは、主には日本の研究者や市民から提供されたものである。

歴史館の展示物の白眉はハルモニたちの遺品や作品である。とりわけ、故姜徳景ハルモニ、姜順徳ハルモニ、李啓女ハルモニによる、ハルモニたち自身の癒しであり、加害者への告発でもある一連の絵は、韓国国内だけではなく、日本、アメリカなどで展示会を重ね、見る人たちに強い感動を与えてきた。

また、展示物の中の重要な位置を占めるものとして、歴史資料ではない芸術

造形物がある。日本軍「慰安婦」をテーマにした韓国の一流の芸術家たちの作品は、ハルモニたちの遺品・作品とあいまって、歴史館を無味乾燥な歴史資料の展示場としてではなく、人間の本质を照らし出す、哲学的、芸術的、空間として構成するのに重要な役割を果たしている。

歴史資料については、日本の歴史館後援会が資料提供呼びかけキャンペーン(1997-98年)を行い、戦争責任資料センターの林博史氏、西野留美子氏、写真家の伊藤孝司氏、ベルリンの梶村太郎氏などから貴重な資料の提供を受けた。資料収集のために、慧眞前院長など沖縄資料収集团は、1997年11月、沖縄で裴奉奇ハルモニの生涯の足跡をたどって、渡嘉敷島の「赤瓦の家」から、ハルモニが住んでいた那覇市内の牧港のアパートまで訪れたり、郷土史家、国吉勇氏の案内で首里の地下壕に入って直接、遺物を探索した。そこで、沖縄の女性史研究家、浦崎成子氏から軍票などを、国吉勇氏からは、日本軍が使用したコンドームや、櫛、鏡の破片、口紅など、地下壕から発掘された貴重な日本軍慰安所の遺物等の提供を受けた。大きな成果の一つは裴奉奇ハルモニ関連資料であろう。これは、孤独で困難な生活をしていた裴ハルモニを実の母のように世話をした在日朝鮮人総聯合会沖縄支部の金賢玉副委員長(当時)の提供によるものである(58-59頁参照)。裴ハルモニは、金学順ハルモニより20年も早く、1972年に名乗りをあげ、日本軍「慰安婦」制度を告発した。その名乗りが早すぎたことと、沖縄という遠隔地に居たことなどから、一般の注意を喚起するに至らなかったが、裴ハルモニの遺品を持つ歴史的意義は極めて大きい。裴ハルモニは、祖国が「統一したら(北朝鮮にある)咸興で暮らそうよ」と、言っていたので、その遺品が分断祖国の南(韓国)に行くことには、遺品の保管者であった金賢玉さんの心の葛藤があったという。しかし結局、「遺品が人々に日本軍『慰安婦』問題を正しく認識させ、その解決へと繋がりと繋がり、南北の同胞が力を合わせて、その問題を解決する道をひらくなら、ハルモニの遺志に適うことではないか、と考え直し」、寄贈が実現した。実に、歴史館が南北分断や、朝鮮と日本の壁を乗り越えて、人々の心の集うところであることを物語るエピソードである。

今日のナヌムの家

ハルモニたちに人間らしい安定した生活と、公正で透明な運用を保証するために、ナヌムの家を社会福祉専門施設として申請し、1999年11月に社会福祉法人の認可を受けた。その後、老人福祉事業を行なえるように、施設認可を要請し、2000年4月から無料養老施設(入所資格は日本軍「慰安婦」被害ハルモニたちに限り、入

所者規模は10名基準)として認可を受け、月600万ウォン(約60万円)程度の国庫支援を受けている。福祉施設になった後、老人福祉に対する資格証をもった社会福祉士と嘱託医師、看護士などが配置され、ハルモニたちの健康管理をしている。また、ハルモニたちの余暇生活の充実を図る、各種プログラム(ハンゲル講習、韓紙工芸、ゲートボール、心理治療など)も行なっている。

現在、ナヌムの家・歴史館の決議機関は、宋月珠師を理事長とする理事会(ナヌムの家院長を含む5名の理事と2名の監査からなる)であるが、運営の透明性や専門性を高めるために、外部により開かれたものにする必要があるという声が高まっている。それを受けて、すでに、姜萬吉尚志大学総長を歴史館名誉館長として委嘱しただけではなく、ナヌムの家に愛情と関心を持つ関係者・活動家による「運営諮問委員会」と、日本軍「慰安婦」問題に専門的知識を持つ人たちからなる「学術諮問委員会」を構成する予定である。ナヌムの家・歴史館の日常の運営は、福祉施設業務を担当する6名の職員と歴史館業務を担当する2名の職員が仕事をしており、その他に、多くのボランティアたちが運営に協力している。

特に、歴史館運営においては日本人ボランティアたちが、日本人参観者の案内のみならず、通訳、翻訳など、日本との関係で必要な仕事に活躍してきた。1998年、歴史館開館準備作業から参加していた坂本知壽子氏に続いて、川口敬子氏、99年3月から2001年初めまで仕事をしていた米倉万有美氏などは、ナヌムの家に住み込み、ハルモニたちと寝食をともにしながら奉仕活動を行ってきた。彼女たちのハルモニたちに対する深い愛情と献身的な奉仕姿勢は、韓国のメディアにもしばしば大きく取り上げられ、韓国人たちに大きな感動を呼び起こした。また、日本からの来館者に対する親切でわかりやすい案内、そして、来館後もナヌムの家との連絡に大きな役割をし、感謝されてきた。残念なことに、米倉氏以後、日本語のできる後任のボランティアがいなかった状態である。

ナヌムの家と関連するボランティア活動を紹介する。毎週火曜日ハンゲル講習を担当している崔慶子氏、毎月1回訪問してナヌムの家や歴史館の施設などを点検し、煩わしい仕事を処理していただくユニテル通信同好会「共にいきる世界」の会員である金セジン氏、閔洪植氏、毎週土曜日には必ず鍾ミンホンシクのキャバンをかついでハルモニたちの部屋を訪れ、手指鍼をうってくれる崔正権氏など多くの人たちが奉仕活動をしている。特に、崔正権氏は2001年1月27日に『ペー
ルをかぶることが一生の願いであった』ハルモニたちに、ウェディングドレスを着て若い新郎とともに写真を撮って、ソウル郊外のテーマパーク・エバーランドへ模擬新婚旅行に行く機会を提供した。

また、ハンゲル学習とともに、絵の勉強が毎週1回、3年程度、継続して行なわれた。1998~99年に日本の数十カ所で開催された展示会、2000年9月20日から12月3日まで北米7都市(シカゴ、ニューヨーク、ロスアンゼルス、フィアデルフィア、カナダ・トロント、サンフランシスコ)での巡回展示会を経て、日本やアメリカ内の主要メディアを通じて、ハルモニたちの絵と証言を紹介する機会を得た。絵を鑑賞した大部分のアメリカ人からは、『ナチ戦犯に対しては耳が痛いほど聞いているが、第二次世界大戦を起こした同じ戦犯国である日本の戦争犯罪は知らなかった』という声が上がったという。

* 「大同」はもと「黄上房アパート」を売り出して急成長した中堅企業である。黄上房とは、朝鮮伝統の黄土(赤土)で作った家のことで、烈寒の朝鮮の気候に適合した冬暖かく夏涼しい性質を持ったいるが、一時は「現代化」のかけ声のなかで、「非衛生」で「不便」なものとして淘汰されつつあった。ところが、急な産業化の坂を駆け上り一息つく余裕が出てきた韓国で、「国産」「在米韓」「伝統」の再評価・見直しが行われたこととあって、黄上房が人気商品として脚光を浴びることになった。さまざまな接着剤や化学物質を使って、シック・ホーム症候が取りざたされている最近の安直な建物とは違い、黄土作りのオンドルは熱すると、さまざまな有効成分が発散するとやらで、健康ブームに乗って大当たりした。

(ソ・スン、立命館大学教員)

ナヌムの家のハルモニたち

現在、「ナヌムの家」で9名のハルモニが共同生活を営んでいる。初期からのメンバーである金順徳ハルモニ、朴頭理ハルモニ、朴玉連ハルモニ、金君子ハルモニ、在の「ナヌムの家」に移ってからは、裴春姫ハルモニ（96年）、金君子ハルモニ（98年）、韓道順ハルモニ（2000年）に続いて、中国から帰国し国籍を取り戻して永住している池石伊ハルモニ、姜日出ハルモニ、李玉仙ハルモニ（以上3名は2000年）が暮らしている。ここでは現在入居している9名のハルモニと、以前入居していた金福童ハルモニ、李容女ハルモニ、ナヌムの家で亡くなった姜徳景ハルモニ（97-98頁も参照）、金玉珠ハルモニ、文明今ハルモニの証言と近況を紹介する。

* ハルモニの証言については以下の証言集を参考にし、そのうえで「ナヌムの家」での生活の様子などを書き加えた。李容女ハルモニ、姜徳景ハルモニは「強制的に連行された朝鮮人軍「慰安婦」たち」（挺身隊研究所編、1993年）、朴頭理ハルモニ、金福童ハルモニは「強制的に連行された朝鮮人軍「慰安婦」たち2」（挺身隊研究所編、1997年）、金君子ハルモニは「強制的に連行された朝鮮人軍「慰安婦」たち」（挺身隊研究所編、1999年）を参考にしている。韓道順ハルモニと、中国から帰国した池石伊ハルモニ、李玉仙ハルモニ、姜日出ハルモニ、文明今ハルモニは挺身隊研究所員がインタビューしたものをもとに整理した。朴玉連ハルモニについては「ナヌムの家」から送られた資料を要約・整理したものである。また裴春姫ハルモニだけは、証言がなかったため、政府の機関で調査した資料を参考に編者の一人である金京子が直接聞き取りをしたうえで作成した。

◎現在暮らしているハルモニ



朴頭理ハルモニ

1924年9月2日、慶尚南道密陽郡で7人姉弟の長女として生まれる。1940年、ハルモニの住む村へやって来たある日本人男性に、日本にある工場での就職を斡旋すると持ちかけられる。お金を稼ぎ両親の手助けをしないと聞いたハルモニは、日本へ渡ることとした。両親も、それを疑わず、反対はしなかった。その日本人の仲間たちは、ハルモニと一緒に10人ほどの女性たちを村から連れ出したという。釜山まで連れていかれ、そこから船に乗せられた。着いた先は、日本ではなく台湾の彰化だった。一緒に連れて来られた女性のなかには、ハルモニ

二とともに彰化で降ろされた人もいたし、また別の場所へと船に乗せられ連れていかれた人もいた。

ハルモニは、彰化で5年ほど軍人の相手をさせられた。ハルモニを村から連れ出した日本人男性は、その慰安所の主人だった。そこにはすでに6人ほどの女性たちがいたが、彼女らはみな朝鮮人女性だったという。その後にも、朝鮮人女性たち（そのほとんどが10代半ばの少女たち）が連れて来られ、通常20人ほどがいた。ハルモニは、1日に10人ほどの相手をしなければならなかった。軍人たちは、陸軍、海軍の区別なく訪れた。軍服の色がちがったので、それを知ることができたそうだ。客には、民間人も含まれていた。しかし、軍人が多ければ民間人はみな帰らされた。軍人は、昼夜をとわず、ひっきりなしにやって来た。彰化には、そのような場所が他にも数カ所あったようである。軍人たちには、一時間あるいは一晩ごとの料金の規定があった。料金は、その慰安所の管理人であった日本人女性が受け取り、主人に渡すようになっていた。管理人が直接お金を受けるため、ハルモニにはその金額がわからなかった。

ハルモニは、あまりに多くの軍人の相手をさせられ、右太ももがひどく膨れ上がり、手術を受けなければいけない状態にまでなった。この手術跡は今でも残っているが、その傷跡は自分が「慰安婦」であったことの何よりの証拠である。ハルモニは言う。他にも、慰安所の主人にひどく殴られたことが大きく原因たらし、年のわりに耳が遠く、補聴器をつけなければ自由に会話できない。右太ももの手術後、ハルモニがいた慰安所の「慰安婦」20人全員が別の慰安所に移され、1年ほど働かされた後、そこで解放をむかえた。

解放後、慰安所で働かされていた女性たちは全ては全にばらばらになったが、ハルモニは船に乗り釜山に戻った。そこから汽車に乗り、故郷の村へ帰ってきた。その2年後に知人の紹介で結婚したが、「慰安婦」であった過去について夫は知らないまま、この世を去った。娘2人息子1人をもうけたが、娘1人は幼い頃に亡くなり、息子も1982年に亡くなったので、今は娘1人を残すのみとなった。

「ナヌムの家」には、1992年の冬から暮らしは始めている。共同生活には少し不便もあるが、一人で暮らしていたころよりも心が安らいで良いそうだ。1992年12月、戦時中の日本軍「慰安婦」や女子勤労挺身隊員への日本政府の公式謝罪と国家賠償を求めて山口地裁下関支部で起こされた「関釜裁判」には、原告として加わり、その陳述のため何回か日本を訪れた。自分には残された時間はないとうとうとどかないと言いい、一日も早い日本政府からの謝罪と賠償を求めている。

いる。

* 鼠疫部リンパ腺の腫瘍であると推測されるが、これは性病の症状の一つで、現在ではほとんど発生しない。



キムスンドク
金順徳ハルモニ

1921年、慶尚南道 宜寧 郡で5人兄妹の次女として生まれる。一家は貧しく、幼いころから奉公に出ていたが、1937年、日本の工場で働く女性を募集しているという話を聞き、日本へ渡ることを決める。ただ工場へお金を稼ぎに行くものだけでなく、それがとても危険なことだろうとは考えてもみなかったそうだ。

まず釜山までバスと汽車に乗せられ、そこから船で長崎に着いた。ハルモニとともに、30人の女性が連れて来られた。長崎に着いたその日の夜、ハルモニは軍人に強姦されたという。そんなことが毎晩続き、1週間が経った頃、再び船に乗せられ、今度は中国の上海へと連れて来られる。一緒に日本へ渡った30人の女性が、一斉に移動させられたのである。そこでハルモニは、陸軍部隊の外に設けられた慰安所にとどまることとなる。そこにはすでに、日本人女性2人と朝鮮人女性20人ほどがおり、新しく連れて来られた30人を合わせると、女性の数は50人ほどに達した。その50人のなかで、病気で寝込んでいた人などを除き、毎日平均35人ほどの女性が軍人の相手をさせられた。一日に30～40人の軍人が訪れ、寝る暇もないほどだったそうだ。部隊が移動すると、慰安所も後を追うように前線へと移動し、最後にとどまった所は南京であった。軍人たちは、訪れるたびに小さな票のようなものを置いていった。それを集め慰安所の主人に手渡すと、彼はそれをノートに記録していた。戦争が終わって日本が勝利すれば、金持ちにしてやると言われたが、給料が支払われたことはなかった。

高級将校のために、慰安所から数人が選ばれ、部隊のなかに送られることもあった。この女性たちのなかにハルモニも選ばれ、「イズミ」という将校と頻繁に会うこととなる。「イズミ」は戦闘がそれほど激しくなくときには部下を慰安所へ向かわせ、ハルモニを部隊へ連れて来させ、二、三日自分の部屋に泊めもした。慰安所生活を送って3年くらい経った1940年、「イズミ」は、ハルモニの体調があまり思わしくないこと、そして戦闘もますます激しくなるだろうことを

心配し、ハルモニに必ず自分が迎えに行くから先に帰郷するようにと言った。そして、ハルモニと一緒に帰ることを希望した4人の女性を含む5人を帰郷させるよう、慰安所の主人に命令した。慰安所の主人は、高級軍人の命令だけに拒むこともできず、ハルモニたちはお金を一銭も受け取れないまま帰郷した。「イズミ」が作成した帰郷証を持って、ハルモニは故郷へと帰って来たのである。

故郷へ戻りはしたが、まわりの人たちがひそひそと自分の噂話をするように思えたし、家も貧しく生活も大変だったもので、ソウルで働くことにした。そこで朝鮮北部出身の鉄道庁に勤める男性と知り合い、その男性の妾となる。息子3人娘1人をもうけたが、娘を朝鮮戦争の爆撃で亡くし、苦勞して大学にまで通わせた次男を、1996年交通事故で亡くす。1992年の金学順ハルモニの証言や、「慰安婦」問題の番組をテレビで見えからは、それまで一人で胸の内に秘め続けていた辛い悔しい思い出が呼び起こされ、眠れぬ日々が続いたという。身内の多くはハルモニが申告することに対してひどく反対したが、それでも勇気をもって名乗り出ることを決めた。

申告し終えてからは、恨が半分は解けたようだという。日本にも幾度となく訪問し、学生をはじめ多くの人々に、日本軍「慰安婦」問題の真相について生々しい証言を行っている。また2001年、北米6都市で開催されたナヌムの家のハルモニたちの巡回絵画展に出向き、そこで行われたハルモニの勇気ある証言は、多くの人々にこの問題への関心と、感動を呼び起こした。



キムグンジャ
金君子ハルモニ

1926年、江原道 平昌 郡で3姉妹の長女として生まれる。

父親を10歳のときに亡くし、母親も14歳のときに亡くなる。その後、母方の叔母の家で過ごすこととなるが、生活は苦しく、16歳のときある巡査の家の養女となる。その養父に「お金を稼げる場所があるので行っておいで、稼げなかつたら帰って来ればいいから」と言われ、家まで連れに来た朝鮮人の軍人と一緒に、故郷後にする。1942年3月のことであった。

迎えに来たその男はハルモニを貨物列車に乗せ、中国の琿春へと連れていった。ハルモニを含む8人の女性が、そこへ連れて来られたそうだ。着いた先で

は、すでに9人の女性が働かされていた。表の門の上に「キンカク慰安所」と書かれた旅館のような所で、1年半くらいを過ごした。軍人たちは、土日にひっきりなしにやってくる。一人で来ることはなく、将校に連れられて団体でやってくる。前の庭では100人以上の軍人が、列をなして自分の順番が来るのを待っていた。多い日には、1日に40人ほどの相手をしなければならなかった。そう。平日には、将校たちがやってくる。慰安所で働かされることとなった。初日に、日本人将校の相手をすることを拒絶したハルモニは、ひどく殴られ右耳の鼓膜が破れてしまった。妊娠した女性たちは慰安所の主人に流産させられたが、ハルモニもそのころ流産した経験がある。お金を受け取ることはなく、票のようなものを主人に渡していたようだ。

二度目に連れていかれた場所は、「コガ市」^{*2}という所であった。部隊が移動するので、慰安所もともに移動させられたのである。7人の女性が連れていかれた。そこでの生活も理春にいたときとほとんど変わらなかった。ハルモニは、そこで解放を迎えたのである。

朝鮮の解放を、ハルモニははつきりとわからなかった。もう好きな所へ行っていいと言われ、一緒にいた女性たち7人とともに、白頭山^{ベクトウサン}を目指して歩いたという。白頭山まで来ると、豆満江^{トウマンガン}を越えて朝鮮の地へと帰って来た。慰安所からは着のままで、何も受けとれずに出てきたという。

故国にもどってからは、飲み屋で働きながら1年ほどを過ごし、ソウルへとやって来た。派出所の主任だった男性と親しくなるが、その男性に妻がいることがわかり、別れてからは一度も結婚することはなかった。ソウルに来てからは、住み込みの家政婦をして働いたり、行商をしたりしながら暮らした。そう。1996年2月に元「慰安婦」であったことを登録し、1998年3月からナヌムの家で暮らしている。ハルモニは信仰心が厚く、現在はカトリックの信者として毎日数時間の祈禱を欠かさない。2000年8月、「美しい財団」に5000万ウォン（約500万円）を孤児のための奨学金として寄付し、ひとから助けを受ける立場に止まらず、自らがひとの役に立つことができることを喜んでいる。

*1 朝鮮では一般に年齢を数え年でかぞえる。ハルモニたちの証言はすべて数え年でなされている。満年齢に直すときさまざまな不都合が出てくるので、数え年で証言されていることを念頭においていただきたい。届出が遅れたため、戸籍の混乱があったりして、戸籍の年齢が実際とは異なることがよくある。

*2 「コガ市」は、中国の地名を日本語読みしたものである。理春のそばにある、小さな市の名と推測される。



ベトナム 裴春姫ハルモニ

ベトナム・フアトロン

1923年3月12日、慶尚北道星州郡で2人兄弟の長女として生まれる。1941年19歳のとき、すでに母親は亡くなっており、家事手伝いをしていたが、友達の家遊びに行ったりして、日本人と朝鮮人の募集業者2人の、「就職させてやる」という言葉に騙され、中国の佳木斯^{チヤムス}まで連れていかれる。そこで解放まで「慰安婦」生活を送った。慰安所には朝鮮人女性27名がいて、1日11名から15名の相手をさせられた。ひもじい思いをした。

解放後、すぐに帰国することができなかった。解放のことは知っていたが、慰安所に放置されたまま、ばらばらになり、帰国しようがなかった。収容所を経て中国の各地を転々とした後、1951年日本へ渡り、30年間日本で暮らした。

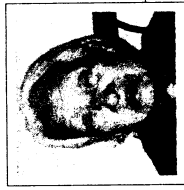
1981年帰国。まもなく家族と出会い、一緒に生活していたが、日本から持ってきたお金を全部、唯一の血縁だった腹違いの兄に騙し取られてしまう。そのせいか、ハルモニは人を信じることができなくなってしまう。その後の生活は苦しく、生計を立てるため食堂、飲み屋、家政婦、下働きなどを転々とした。結婚はしていない。「ナヌムの家」には1996年10月入居。

ハルモニは、政治に深い関心を持ち、ニュースなどを欠かさず見ている。特に金大中大統領のファンである。また、歌はなかなかのものである。しかし歌を歌ってくださうと、なぜかいつも最後に歌う。興に乗ってチャンゴを叩きはじめる。時間を忘れ、歌とチャンゴの音がいつまでも響く。

綺麗に化粧をして、身なりなどもかなり気を使っている。日本語と中国語が流暢で、ロシア語もできる。特に日本からの来客者には日本語で積極的に声をかけたり、訪問後も文通などをしてしている様子。2001年4月、日本人ボランティアの米倉万有美さんが日本に帰国してから、問い合わせの電話や訪問客の案内などの仕事を引き受けたりもしていた。

またハルモニは、絵画の腕前もなかなかの実力派で、「ナヌムの家」の花壇の石に色とりどりの鮮やかな絵を画いている。





池石伊ハルモニ

1923年6月5日（旧暦）慶尚北道慶州市で7人兄弟の長女として生まれる。家族は土地を借りて田んぼを耕していた。安康普通学校を卒業し、18歳のと結婚した。その後、夫の家族とともに日本へ渡り4年ほど住んでいたが、夫が徴兵されるや朝鮮に戻り、実家の農業などを手伝いながら生活した。22歳のとき、村に30歳くらいの女性（朝鮮人）がやってきて、中国の紡織工場で働く人を募集するというので、志願して、1945年3月、汽車に乗り中国に向かった。

東寧でバスに乗り換えていたのが石門子慰安所だった。騙されてきたのが悔しくて毎日泣き暮らした。慰安所の建物は古く、雨が降るとすぐ漏れだした。順番で薪を取りに行ったが、大変寒く苦労した。中国にきて実家に手紙を出したが、その後、弟から父が亡くなり、家族がバラバラになったとの知らせが届いた。

慰安所では「ひさこ」と呼ばれた。「ひさこ」はそこで付けられたのではなく、結婚後、日本で住んでいたときに姑（しやうとめ）がつけた名前である。朝鮮からハルモニを連れてきたのは慰安所の主人（日本人）の妾だった。慰安所には7～8名の女性がいて、軍人が毎日やってきた。週末には食事を取る時間もなく、軍人の相手をさせられた。軍人は女たちに乱暴を働（ど）いたりした。食事はコーリャン飯と大根の漬け物くらいしかなく、まずくて喉（のど）を通らなかつた。故郷の慶州ではあわもコーリャンも見ることがなかった。

その後ソ連軍が進撃するという噂が広がり、日本軍がバツタリ来なくなり、慰安所の主人は姿をくらました。ハルモニは一緒にいた女性たちと避難する途中、一行にはぐれてしまい、中国に残った。解放後、お金もなく国に戻れず、中国人と結婚した。子どもを産むと永遠に国へ帰れないのではないかと思い、3人を流産させたのちに、一男一女をもうける。娘は教師になり、息子は農業をやっている。8歳年上の夫は1996年に亡くなった。

中国と韓国との国交が結ばれ、自由に往来ができるようになってから韓国の道赤十字を通じ韓国の兄弟の居所を知り、手紙などで交流を続けながら帰国の道を探った。しかし兄弟たちの生活が苦しく、身元を引き受けてくれる人がいなかったため、一時は帰国を諦めていたが、「ナヌムの家」とつながり、ようやく

帰国の道が開かれた。

2000年6月1日、李玉仙ハルモニとともに帰国し「ナヌムの家」で生活している。「ナヌムの家」で他のハルモニたちと共同生活しているうちに、忘れていた韓国語を少しずつ使いはじめた。ハルモニは耳鳴りがひどく頭が痛いといい、口数が少ない。車酔いのため、外出は嫌がる。カード占いが好きで、中国から帰国した姜日出ハルモニと中国語でおしゃべりするのを楽しんでいる。最近是中国にいる家族への恋しさが募るばかりのようだ。



李玉仙ハルモニ

1927年（戸籍上、1928年）釜山市寶水洞で6人兄妹の2番目として生まれる。父は日雇い労働、母は下働きなどをしていたが、それでも糊口をしのぐのがやっとの貧しい家庭で育った。学校に行くことは考えもできなかったが勉強がしたくて、12歳頃から学校に行きたいとせがんで殴られたりもした。

そんな折、14歳（40年春）のとき、お金も稼がせてやるし、勉強もさせてやるというわれ、釜山の波止場近くの小さな飲み屋に養女として売られていった。そこで半年あまり暮らしたが、働かされるのみで学校にも行かせてもらえないので逃げ出したところ、再び捕まり、今度は蔚山の飲み屋に売られた。

1942年7月中旬の夕刻、使いに呼ばれた際に、朝鮮人男性2名に捕まり、中国の延吉にある空軍部隊の東飛行場に連れて行かれた。そこでは1年ほど下働きをさせられたが、その間日本軍人たちから日常的に強姦された。その後一緒にいた女性たち全員が延吉市内にある慰安所に移され、3年ほど「慰安婦」生活を送った。

慰安所は狭く、10名あまりいた女性が入りきらず、1部屋に2～3名が入った。初めは部隊内の庭にゴザを敷いて使うこともあったが、突然軍人たちが部屋に入ってきて、他の同僚が見ている前で獣のように女性を強姦した。そこにいるときはサック（コンドーム）も使わず、性病検査もなかった。妊娠した女性が1人いたが、子どもが生まれると、日本軍人が連れ去ったという。しばらくして近くに慰安所が新築されて引越したが、そこでは1人に1部屋ずつ当てがわれた。

ここでは週に1回ずつ数名の軍医官がやって来て性病検査をした。梅毒にか

かったが、606号注射を打たれても完治せず、管理人が水銀を身体に当てて治療し、その後不妊症になった。性病は無料で治療されたが、他の病気の治療はしてもらえなかった。使いに出的際、朝鮮人の警官に殴られて鼓膜が破れ、耳から膿が出るなど酷い状態だったが、治療を受けることができず、今も耳がよく聞こえない状態だ。

16歳くらいのとき、慰安所で初潮を迎えたが、生理中も軍人の相手をさせられ、週末には25名ほどの軍人を相手にした。言うことを聞かないときには革のベルトで鞭打たれた。

戦争が終ると、慰安所管理人が「慰安婦」たちを山に残して逃げてしまったので、市内に出た。それから生きている糧も無かったが、延吉の東飛行場に報国隊としてきていた朝鮮人男性と出会い、結婚した。しかし、夫が解放前に勤労奉仕隊長として日本に協力していたことが問題となり、夫だけが朝鮮に逃げ帰ってしまった。その後10年間婚家で暮らした後、姑の勧めで再婚した。

夫の連れ子を育て、韓国に帰国するまでは痛風にかかった夫と、息子の子2人を学校にやるなど、実質的な大黒柱の役割をした。

1999年末、夫が亡くなってから帰国を決意、2000年6月1日、池石伊ハルモニとともにナヌムの家に来た。物事の分別をわきまえ、常に他人に配慮して行動する。特に、向かいの部屋の金君子ハルモニと一緒に教会に通い、姉妹のように頼っている。また、勉強できなかったことが今も悔まれるのか、聖書や小説などを分厚い老眼鏡をかけて熱心に読み、勉強している。



朴玉蓮ハルモニ

1919年（戸籍上、1920年）4月20日、全羅北道茂朱郡で農業を営む両親のもと、6人姉妹の3女として生まれる。普通学校に2年生まで通ったが、学校に行くのが嫌でやめ、その後夜学でハングルを学んだ。

16歳のとき、貧しい家に嫁いだものの逃げ帰り、18歳（1936年）で再び金持ちの家に後妻として入る。夫は家柄が良く財産もあったが、非常に嫉妬心が強く、酒が入ると殴られた。2年後の20歳のときに息子を産んだ。夫は2年間、日本に出稼ぎに行き帰ってくるたびに猜疑心も酷くなっており、虐待を受けたあ

げくには息子を取りあげ、業者にはハルモニを売り渡した。23歳になった年（1941年）の10月頃だった。

ソウルにある紹介所で慰問団の募集の噂を聞いて、夫が受け取った身売り金を早く返し、強制的に別れさせられた幼い息子と一緒に暮らしたい一念で志願した。野戦病院で軍人たちの服を洗濯したり負傷軍人を看護したりする仕事で、およそ3年も働けば借金も返せるとのことだった。ソウルを出発した後、釜山を通って下関まで行き、そのまま軍艦で1カ月半かけて到着したのが南太平洋最南端の激戦地バブア・ニューギニアのラバウルだった。

軍人を相手にするなど、夢にも思わなかった。食事のとき以外は部屋から出ることもなく、内から戸を閉めた。慰安所の主人が探しにきては「そんなことをしてどうやって借金を返すつもりだ」と脅した。逃げようにも四方を海に囲まれていて、逃げることもできなかった。

「しずこ」と呼ばれ、1日に20〜30人ほどの相手をしながら「慰安婦」生活を送った。軍人には必ず日本語を使えと、慰安所の主人から熱心に日本語を教えられた。性病にかかる人も多く、野戦病院から週に1度、検診に来た。性病にかかると606号注射を打って1週間ほど治療を受けるが、このときばかりは「休暇」の礼を下げることでできた。ハルモニは、生理のときにもそうしたそう。

1944年に帰国した。故郷では両親が生きていた。子どもに会いに行こうとしたが、母に止められた。その年、面（村）事務所の戸籍課で働いていた人の後妻に入った。子どもは産めないものと思っていたが、結婚してすぐに子どもができて、1男2女をもうけた。

ハルモニは、子ども、特に孫に対する愛情が厚く、子どもたち以外の他人からは誕生日の祝いさえも受けようとしないう風変わりな性格の持ち主だ。普段は冷静沈着で物静かだが、客が来て一言求められれば、日本が一日でも早く賠償しなければこれから何世代にも渡ってその罰を受けるだろうと怒鳴りつけたりもする。よく笑う反面、際立って口数が少ないが、時に気骨のある一言を声に出すなど、ナヌムの家での年長者としての役割を充分に果たしている。

ハルモニは食欲がなくなってもご飯をゆっくり囓んで食べ、タバコを一服吸ってから散歩に出る。いつも、一人暮らしをする長女のことと心配が絶えなかったが、2000年6月1日からナヌムの家の炊事係を任せ一緒に暮らすようになった。今は、ひとつの悩みが解消され、平安に過ごしている。



ハンスン 韓道順ハルモニ

1918年（戸籍上は1921年）4月19日、全羅北道完州郡で4男1女の一人娘として生まれる。

14歳のとき、家が貧しく口減らしのため嫁に出された。結婚しておよそ3年間暮らしたものの、夫が亡くなり、実家に戻るようになった。

19歳の春（1936年ごろと推定）、山に行こうとして家を出ると、見ず知らずの年配の男性が、お前は本当にかわいいといいながら、自分について来たら贅沢をさせてやるといった。嫌だといったら髪を引っ張って無理矢理に連れていかれたところ「満州」だった。それから9年間、「慰安婦」として監禁されたまま生活した。

慰安所の主人は日本人夫妻で民間人だった。他の女性も10名ほどいた。その家にしばらくいた後、他の慰安所に移った。平屋建ての家だった。軍人たちは歩いてやってきた。平日にも週末にも来るが、休日や土曜日に多かった。多くの軍人の相手をしなければならず、とても辛くて嫌だと拒否しようとする、激しく殴られた。剣を下げた軍人が来ると、とても怖かった。他の女性も足で蹴られたりもした。母を思い出してはよく泣いたという。

月に一度は主人に連れられ病院に行った。性病検診を受けるためだが、妊娠したり性病にかかったりしたことはない。他の女性のなかには、病名は知らないが病気にかった人もいたという。

慰安所の主人や軍人から、お金を受け取ったことは一度もない。後でくれるという話もなかった。月に一度は休みの日があり、その日は一日中寝た。

ある日、主人夫妻が全て終わったから村に行けといい、汽車賃をくれた。汽車賃のほかに1銭も持っていないかった。他の女性たちは何処へ行ったのかわからないが、汽車に乗って故郷に向かった。眠ることができなかった。汽車には同僚だけが乗っており、故郷までは3日間ほどかかった。

家に帰るとすでに冬だった（1945年推定）。村の人々からは「満州に行って来たいわくつきの女」と陰口をたたかれて蔑まれた。

再び、下働きなどで転々と食いつないでいた。61歳のとき、息子3人、娘3人を持った老人と結婚し、11年間一緒に暮らしたが、93年11月に夫に先だたれ、

その後生活保護対象者となる。甥の申請で「慰安婦」対象登録をして2000年4月からナヌムの家に入り生活している。

ナヌムの家のなかでは最年長者だが、2000年12月「女性国際戦犯法廷」にも参席し、水曜デモにも一度も欠かさず出席するなど、ナヌムの家の対外的な行事に黙々と参加している。子どものような天真爛漫な面があり、誰が何と言おうと「ああ、そう」と答える。1998年腰を痛め、常に腰にサポーターを巻いて15度くらい反り返って歩く姿が痛々しい。



カンイルチュル 姜日出ハルモニ

キョンサンプクト・サンジュ アンドンミョン 慶尚北道尚州郡安東面で12人兄弟の末っ子として生まれ

1928年10月26日、そのとき、すでに上の兄弟6人は亡くなっていった。子ども時代、いとこに連れられて学校に通っていたが、父母の畑仕事の手伝いや、食事の準備などで学校にはあまり通えず、14歳ごろからは家にいた。

連行されたのは1943年、16歳のときだった。当時「処女供出」「報国隊」の名目で若い女性を募集する動きが激しくなっており、ハルモニの家にも警察が刀をさげてやって来た。そのとき、家にはいとことハルモニしかおらず、とても拒絶できる状況ではなかった。しかも軍靴の紐を編む工場で働くと思われたのだ。

その後、多くの朝鮮人、日本人、中国人の女性たちとともに汽車や車、トラックで中国の奉天（現在の瀋陽）から新京（現在の長春）、牡丹江へと移動させられた。途中で降ろされる女性もいれば、新たに加わる女性もいた。牡丹江の慰安所は煉瓦造りの兵舎のような所だった。そこで30余名の女性たちとともに「慰安婦」生活を強いられた。

到着後まもなく全員車に乗せられ、軍人病院に連れていかれて身体検査を受けた。工場で働くかされるものと思っていたハルモニは、何がなんだかかわからなかった。性病検査は耐えがたいものだったが、その後も週に1回ぐらい定期的に検診を受けさせられた。

慰安所では「オカダ」と呼ばれた。朝鮮人女性をはじめ日本の女性、台湾の女性もいた。ひとつの部屋にいれば、呼ばれると出て行った。ハルモニは当

初年配の将校の相手をさせられた。まだ生理も始まっておらず、想像を絶する苦痛を受けたうえ、あふれる血を見て叫んだハルモニを見て、彼は胸倉をつかんで押さえつけながら殴ったり蹴ったりした。そのとき頭を殴られたのが原因で膿が出るなど長い間苦しめられ、いまもそのときの傷跡が残っている。

その後はひとつの部屋があてがわれ、1日に7、8名の兵士の相手をさせられた。しかし、暴力は止むことなく続いた。慰安所に来た翌年の春に腸チフスにかかり、高熱が続き、食事も摂れなくなってしまう。軍は他の人に移されることを恐れ、ハルモニを焼き殺してしまおうと考えたらしい。1945年初夏の頃、軍人に連れられ車に乗せられて山のふもとに行くと、すでに薪を積み上げ、火を燃やしていた。しかしそのとき、朝鮮人たちが日本の軍人と乱闘のすえ、ハルモニを背負って逃げた。

逃亡後、ある朝鮮人の家に預けられ、そこでしばらく養生した後、ある朝鮮人男性と結婚した。1女をもうけたが、その後朝鮮戦争がはじまり、中国人民志願軍として参戦した夫は戦争で死亡、娘も3歳ぐらいで病気で死んでしまった。19歳のときだった。朝鮮戦争時は、(中国人民)解放軍の看護婦として働き、戦後も中国吉林の病院で看護婦として勤務しながらひとりで暮らしてきた。

30歳を過ぎて中国人と結婚するが、夫の浮気などが原因で1962年、故郷に帰ろうと子どもを背負って平壤まで行った。しかし、軍事境界線に阻まれて故郷には帰れないことがわかり、再び中国に帰った。このため、しばらくスバいの疑いをかけられた。

その後夫とは離婚、46歳で退職し、吉林市で年金生活を送っていた。2男1女がいる。数年前、「ナヌムの家」が推進する帰国事業のことを知り、何回かの祖国訪問を経て息子とともに帰国を果たした。2000年4月にナヌムの家に入居、同年10月には国籍回復も実現した。

現在、高血圧と糖尿病を患っており、白内障の手術も受けた。「慰安婦」生活の後遺症で、今でも頭痛に悩まされ、緊張すると身体がぶるぶる震えたり、鼻血が出るなど、心と身体に負った傷の深さを物語っている。また、入居当初は「ナヌムの家」での生活になじめず、何日間も家を空けたりしていたが、現在では得意の「餃子」や中国料理をふるまったり、韓国語が不自由で耳の遠い池石伊ハルモニの面倒を見るなど、なごやかに過ごしている。

●ナヌムの家で暮らしていたハルモニ



キムボクドン 金福童ハルモニ

キョンサンナムドキョンサン

慶尚南道梁山で1926年5月1日、6人姉妹の4番目として生まれる。15歳になった1941年のある日、村の区長と黄色い服を着た日本人が家にきて、息子がいないのなら娘でも挺身隊に差し出さなければならぬといった。母が挺身隊とは何かと尋ねると、軍服工場で働き、3年したら帰ってこられると言って無理に書類に判を押させた。

そうしてハルモニはバスで釜山に連れていかれ、他の地方から連れてこられた結婚前の20名ぐら이의女性とともに倉庫に監禁された。ハルモニを連れにきた日本人と、日本に長く住んだという通訳の朝鮮人がハルモニたちを引率し、下関を経て台湾に連れてきた。そこでハルモニたちはモンベに着替えさせられ、言われたとおりの手紙を書いて親に送った。再び貨物船に乗せられ着いたところは広東だった。ハルモニたちは衛生病院に連れていかれ強制的に性病検査され、ある建物に連れていかれた。そこは悪夢のような日々が始まる慰安所だった。建物の真中に廊下があり両側に部屋があてがわれた。ハルモニたちは番号と「慰安婦」の名前が書いてある部屋をあてがわれた。部屋は狭く木の寝台が1つあるだけだった。隣とはベニヤ板で仕切ってあるだけで息遣いまで聞こえた。ハルモニたちは慰安所からは外にでられず、引率してきた日本人と朝鮮人が門の前で監視していた。その日の昼、軍医がハルモニの部屋に来て逃げるハルモニを捕まえ、すごい力で頬を殴った。怖くて抵抗する力も失せ、なすがままになっただが、初めてのことで怖くて震えがとまらなかった。性器から血が出て裂けるように痛く腫れ上がった。小水も出なかった。死のうと思い手に入れた白乾児酒を飲んだが見つかって胃を洗滌され死ねなかった。それが原因で3カ月間も食事がまともに出来ず、今も胃が悪く苦しんでいる。

ハルモニたちは1日に15人程度、週末は50人を超える男を相手にしなければならなかった。名前も「カネムラ・フユコ」または「ヨシコ」と日本名をつけられた。性病検査は1週間ごとに定期的にさせられた。しばらくして急にトラッ

クに乗せられ今度は香港、それからまた今度はシンガポールに連れていかれた。とても暑く大砲の音が常に聞こえた。その後スワトラ、インドネシア、マレーシア、ジャワへとハルモニたちは軍隊とともに移動を続けた。休み時間が少しでもできればハルモニたちは集まって泣いた。

急に軍人たちが来なくなり、しばらくすると日本軍人が赤十字の車に乗ってきてハルモニたちをシンガポールにある第10陸軍病院に連れて行った。そこで日本が負けたことを知った。そこで看護訓練を受け、病院で働いた。ある日、いとこと結婚した男性が尋ねてきて、その人のお陰でハルモニたちは米軍収容所に行き、最後の帰国船になんとか乗って釜山に帰り着くことが出来た。5年ぶりの故郷だった。ハルモニは体を酷く壊していて療養に1年かかった。体調が戻ったら母が嫁にいかと哀願した。仕方なく母に看護婦でなく「慰安婦」をしていたと告白すると、母は慟哭し心臓を患うようになった。

母の願いで結婚はしたがうまくいかず離婚して、その後再婚したが夫も亡くなり一人暮らしをした。

金福童ハルモニは、「日本軍『慰安婦』歴史館」の開館の計画が募金などの問題で1998年3月から8月に延期されたとき、「歴史館」のためにと1000万ウォン(約100万円)を寄付金として提供した。また、開館の際は次のような挨拶のことばを寄せている。

「多くのハルモニたちが、“恨”を解かずに死んでいきました。私たちがどれだけ日本の犠牲になったかを子どもや学生が知り、“恨”を解いてほしい。二度とこのようなことが起きないように、学んでほしい。あなたたちがこのようになってはいけない」



イヨシニヨ
李容女ハルモニ

1926年2月10日、京畿道驪州郡で5人兄妹の長女として生まれる。

一家はたいへん貧しく、8歳のころから奉公に出る。11歳のときに家族とともにソウルに出て来て製菓工場などで働くが、14歳のときから1年ほど奉公していた家の女主人に「日本でお金をたくさん稼げるところがあるから行ってみないか」と持ちかけられる。結局、その女主人の言葉に騙され、1942年、汽車

で釜山まで行き、そこから船に乗り台湾・シンガポールを経てビルマ(ミャンマー)のラングーン(ヤンゴン)に連れて来られる。着いた先は、日本ではなかった。

ラングーンからは汽車に乗り、ある村まで行き、そこで「慰安婦」生活が始まった。50人ほどの慰安婦がいた。そこでは「原田容女」と呼ばれた。1年ほど経った後、今度は山奥の村まで移動させられる。食事も満足にできず、故郷恋しさに気が変になってしまい、6カ月ほど狂ったかのように徘徊しながら過ごしたこともあった。慰安所には、将校に連れ出され同居生活をしたり、病気で亡くなったり、逃げ出したりする女性たちもいて、「慰安婦」は最終的には20人ほどになっていた。

軍人たちが、やって来るときには名刺ほどの大きさの票を置いていったという。それを集めると、通常1日に10枚から15枚、多い日は20枚ほどになった。週に1度ずつその票を集め、事務所へ持って行った。そこで計算され、貯金されているという話を聞いたが、通帳があるのかどうかについて、知ろうとは思わなかった。

ある日、軍人が全く来なくなった。戦争が終わったのだ。どこから来たのか朝鮮人の男性たちが現れ、「慰安婦」の女性たち全員をそこから連れ出した。そして一行は山奥の村から歩いてラングーンまでやって来た。ラングーンの収容所では、朝鮮人たち——徴用で来た男性たちと日本軍「慰安婦」たち——は、ともに生活した。各地から集まって来た女性たちが50人ほどいた。

解放の翌年の1946年3月、故国に帰って来た。その後は、食堂で働いたり家政婦などをしながら、やっとのことで生計を維持してきた。結婚する気にもなれず、朝鮮戦争のときに知り合った17歳年上の男性の同居人として暮らしたが、57歳のとき、その男性に死なれた。子供は産めなかったので、その男性の息子を養子として引き取り、一緒に暮らした。

ナヌムの家の初期から入居しはしたが、ほかのハルモニたちと気が合わなかったため、ナヌムの家がある京畿道広州で一人暮らしをしたりした。現在の「ナヌムの家」の建築の際には、工事をする人夫たちをさまざまに励ますなどその完成のために尽力した。1996年末からは念願だった息子の家で暮らしたり、1999年年末から2001年春まで「ナヌムの家」に戻ってきて生活したこともある。

●ナヌムの家で亡くなったハルモニ



姜徳景ハルモニ (97-98頁も参照)

1929年2月、慶尚南道晋州で生まれる。1997年2月2日午後3時頃、肺癌のため、ソウルの中央病院で永眠。

父親を早くに亡くし、その後母親は再婚し、ほとんど母親の実家で育てられる。母親の実家は少し裕福だったので、国民学校普通科6年を卒業し、高等学校にも入った。吉野国民学校高等科1年の1944年6月頃、女子勤労挺身隊1期生として日本へ渡る。日本人の担任の先生が家庭訪問し、挺身隊員となるよう言いに来たのである。勉強もでき、お金も稼げると付け加えた。母親は泣きながら引き止めたが、ハルモニは行くことを決める。ハルモニのクラスからは、班長とハルモニの2人が挺身隊員となった。

晋州で集められた挺身隊員は、50人だった。釜山に行ってみると、他の地域から集められた人たちもいて、全員で150人にのぼったそうだ。釜山から連絡船で下関に着き、そこから汽車に乗って富山県の不二越飛行機工場へ行く。旋盤で部品を切り取る作業を、1日12時間、昼夜交代でさせられる。給料は貯金するという話を聞いたが、それを確かめたことはなかった。工場での労働も辛かったが、食事が満足にできなかったのは耐え難い苦労だったそうだ。

ハルモニは、そこから2度逃亡を試みた。最初に見つかったときは、工場に連れ戻され、ひどく殴られたという。2度目に逃亡を試みた際には、憲兵につかまってしまい、そのままトラックに乗せられた。ハルモニをつかまえた憲兵は、移動中の山中でハルモニを強姦した。それから部隊へと連れていき、その裏側にあるテントのような家にとどまるよう命令した。そこにはすでに、5人ほどの女性がいた。一つずつ仕切られた狭い空間で、1日に10人ほどの軍人の相手をしなければならなかった。他から軍人がやって来たときには、夜にテントから連れ出され、真っ暗な山中で何人もの軍人の相手をするよう強いられた。そこから部隊とともに移動し、次に着いた先には20人ほどの女性がいたそうだ。お金や票のようなものは、手にしなかったという。

そんなある日、あたりで「万歳！」という叫びの声を耳にする。徴用で連れて来られた朝鮮人の男性たちが、解放を迎え歓喜し叫んでいたのである。ハルモニは、同じ朝鮮人の男性の手助けで、解放から5カ月くらいが過ぎたころ、大阪から密航船に乗り帰国した。そのころ、ハルモニは慰安所で妊娠させられており、帰国後故郷から遠く離れた全羅道で娘を出産することとなる。故郷晋州にとどまることもできず、知り合いのおじさんの紹介してくれた孤児院に娘をあずけ、食堂で働いては、毎週日曜日に娘に会いに行った。その娘を肺炎で4歳のときに亡くし、その後一度も結婚することはなかった。それ以来、食堂で働いたり、商売をしたり、住み込みで家政婦をしたりしながら、たいへんな苦労をした。

1992年に自分が元「慰安婦」であったことを証言してからは、生活が一層困難になり、ナヌムの家に入居する。ナヌムの家で絵を勉強し、日本の戦争犯罪を告発する数多くの作品を残した。自らの体験も含むそれら戦争犯罪の記録ともいべきハルモニの作品の数々は、今も日本軍「慰安婦」歴史館の2階に展示され、私たちにこの問題がいっつも風化することのないよう、訴えかけている。ハルモニはまた、日本大使館前で毎週水曜日に行われるデモのリーダー的存在でもあった。肺癌末期の闘病生活の間も、日本の「国民基金」を受け取ることを最後まで拒否し続け、69歳で逝去了。



金玉珠ハルモニ

1923年に、慶尚北道大邱で9人兄妹の三女として生まれる。2000年2月、永眠。10歳で父親を亡くし、一家はたいへんな苦勞をする。9歳から通った小学校を11歳で退学し、12歳になった3月から、日本人将校の家で5年間住込みの家政婦をすることとなる。17歳になったとき、その将校から、仁川に今の数倍もの給料で家政婦をできる所があるが行ってみたいかと言われる。その給料がそのときの4倍にもなったので、ハルモニは仁川に行くことを決めた。

しかし、汽車に乗って仁川に着くと、そこから船に乗せられた。その船は、中国の青島など数カ所を経由して、海南島へと向かった。仁川からは、ハルモニと一緒に4人の女性が連れて来られたそうだ。海南島の中心都市海口に、慰

安所はあった。「エビス」という名の慰安所で、その主人は日本人女性だった。そこで「慰安婦」として働かされた女性たちは皆朝鮮人で、9人から12人いたという。軍人たちは、慰安所へ来ると軍票を置いていった。軍票は、1日に平均6枚ほどを受け取ったが、それは主人がすべて持っていったそうだ。軍人たちはチップを置いていくこともあり、そういうお金は受け取ることができた。あるいは、月末に最も多くの軍人の相手をした女性には、主人から賞金としていくらかのお金を与えられた。主人は、広東にも連れていって、数カ月間働かせたという。ハルモニは、妊娠して数回流産した。主人がハルモニを民間の病院へ連れていき流産させたのだが、その費用は借金となり、そのうえ利子までつけられた。慰安所との契約期間として、ハルモニには3年間で定められていたのだが、その借金のせいで、契約期間を過ぎても働かなければならなかった。また、ハルモニの背中には今でも大きな傷跡が残っている。遊びに連れ出そうとする軍人の誘いを断ったことで背中を刺されたのだ。

憲兵は、慰安所へ1日10回くらい見回りに来ては、厳しく監視した。主人は、朝鮮語を使うと罰金を課したり、神社へ参拝に行かせたりした。どこかで日本の勝利が伝えられると、軍人たちの集まる場所、一緒になって「万歳!」と叫ばされたりもした。

解放を「エビス」で迎えたハルモニは、翌年の9月、船で日本を経由して釜山へと帰って来た。それから故郷の大邱に戻り、2、3年を何もせずに暮らした。27歳になったとき、するめ売りの商売を始め、釜山へ行く。そこで、ある男性を紹介される。息子はいるが、妻は亡くなったというその男性と一緒に暮らすようになった。7年後に、妻が生きているのを知ることとなったそうだ。その男性とともに、あちこちを転々とした。その間ハルモニは、銭湯で家政婦をしたり、山菜を摘んで売ったり、リヤカー引きなどをするが、苦労の連続だったそうだ。

1993年に元「慰安婦」であったことを申告し、1997年からナムムの家で暮らすようになった。数々の苦労で、お酒を飲むことが多くなってしまうハルモニは、顔色もよい方ではなかった。故郷は大邱だが、慶尚道の訛りがきつくはなく、標準語、江原道訛り、全羅道訛りを混ぜて使ったり、日本語を話したりした。その言葉使いからは、さまざまな場所を生き抜いて来たハルモニの歴史がうかがえるようだった。



文明今ハルモニ

1917年、全羅南道光陽郡で長女として生まれる。2000年11月3日、心筋梗塞及び脳卒中、肺炎の合併症で亡くなった。84歳であった。

18歳まで妹2人、弟1人、母、下働きに出ていた父と一緒に暮らした。18歳の春ごろ、友達と河東に遊びに行ったところ、工場で就職させてやるという日本人(朝鮮人も含まれる)らについて、数日車にゆられ、汽車に乗って中国・孫良まで行った。

2階建て煉瓦造りの家に作られた軍人会館(慰安所)で、昼には酒保(軍部隊内の売店)の兵士、夜には将校と、1日に20〜30名にのぼる軍人たちを相手にしていた。軍人たちは部屋のドアの前で待っていた。軍人会館は軍人が管理し、女性たちは2階の渡り廊下をはさんで両側に長く延びた部屋で生活した。そこには日本人女性5〜6名を含む20名ほどの女性が収容されており、「慰安婦」生活をしていた。そこで初めは「えいこ」、後には「のぶこ」と呼ばれた。

1週間に1度は近隣にある軍人病院に歩いていき、検査を受けた。病氣と診断されれば別個に管理を受けた。自殺する女性もいて、声が聞こえなければ管理人から殴られもした。

爆撃がひどくなったある日、軍隊が全部移動したが、それに女性たちもつき従った。全員立ち去るときに、怖くなって一人で残り、「軍人会館から百里ほど離れたところに、朝鮮人が集まっている」という話を聞いて、そこに行くことにした。そこで朝鮮人男性と出会い、一緒に暮らしたが、その男性は先に他界した。子どもはいなかった。

解放後、帰国できずに慰安所の近くで生活し、中国の孫呉県にある養老院で暮らすうち、1998年4月に慧真師の訪問により韓国国内に文明今ハルモニの生存事実が知らされた。翌年の1999年2月13日、ナムムの家の斡旋で、64年ぶりに故国訪問と家族との出会いができた。

3カ月間の臨時在留期間を終えいったん中国に戻ったが、韓国法務部の国籍回復許可が承認され、1999年9月7日に帰国し、以後はナムムの家で最高齢者として過ごした。ナムムの家ではいつも「好、好」と言いながら笑顔を絶やさなかった。

2000年6月には、韓国政府から支給される生活支援金と、韓国挺身隊対策協議会からの生活補助金など、4300万ウォン（約430万円）全額を、「ベトナム戦争によって苦痛を受けているベトナム人戦争被害者のために使っておくれ」と、「ベトナム民間人虐殺実実委員会」に寄付した。

コラム

沖繩の裴奉奇ハルモニ

金賢玉

2000年12月、東京で開催された「女性国際戦犯法廷」において「昭和天皇は人道に対する罪を犯した。有罪!」、「日本国家は有罪!」と、判決が言い渡されました。また、朝鮮北南の共同起訴状の発表などの報道に接しながら、私は10年前みんなに愛され惜しまれながら逝った故裴奉奇ハルモニに想いをせずには居られませんでした。

裴奉奇ハルモニは1915年、韓国忠清南道新禮院チンギョンナムドシンニョウインに生まれ、1944年、「慰安婦」募集業者に騙され沖繩に連れてこられ、「慰安婦」として働かされました。彼女は「従軍慰安婦」として日本軍による性奴隷の残虐行為とその実態を生き証人として史上初めて告発（1977年4月29日、朝鮮新報＝日本で発行される朝鮮総聯の朝鮮語版機関紙）し、日本政府の否認、歪曲、無視のなかで独り闘い続けた人です。そのようななかで、亡くなる前年の1990年9月、（金九訪朝時に）朝・日共同宣言が発表された日、テレビの前で、ハルモニが「天皇に謝ってもらいたいさ……」と、叫ぶように言ったあの一言、「これで朝鮮の統一と平和が早く来るさ……」と、本当に嬉しそうに朝鮮の地図に見入っていた姿を忘れることができません。

第二次大戦の末期、沖繩戦最初の激戦地だった渡嘉敷島でのアメリカ軍の猛攻撃、日本軍の半狂乱のあがきのなかで奇跡的に生き残り、灰燼と化した戦後を必死に生きのびてきたハルモニでした。1975年、私たちが初めて出逢った時のハルモニは、「友軍（日本軍）が敗けてくやし……」と言い、身も心もボロボロにされ、ただ社会の片隅にひっそりと生きている人間忌避症の同胞女性でした。しかし60歳から17年間のハルモニの晩年は、人知れぬ苦痛を克服しながら自己再生した誇らしい道程でした。「従軍慰安婦」の歴史の生きた証言者として、チームスピリット米韓合同軍事演習や沖繩の米軍基地を糾弾し、そして韓国の民主化の進展や林秀卿リンシュキョウさんの平壤訪問をを心から喜んでいました。「はあ、金日成主席が一番ど……」「あの息子（金正日キムジョンイル総書記）は素晴らしいど……」と、祖国の指導者に心からの敬慕の念を抱いていたハルモニの想いは、2000年6月の歴史的な北南首脳会談と共同宣言をみすえた予